

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：レ レ ウィン

レレウィン氏の学位請求論文「日本の龍観念とその思想的変遷 中世の龍蛇観念を中心に」は、世界にひろがっている「龍」という表象の日本における古代から中世にかけての展開を扱うもので、龍と蛇の混合ないし混同（龍蛇観念）という視点から、日本の龍を捉え直し、古代の蛇と外来の龍がまじりあって、中世の荒神的地龍に展開するあり様を考察したものである。

論文は二部構成であり、第一部「古代日本の『龍・蛇』観念とその思想的背景」では古代の龍が、第二部「中世における龍の表象的変容とその思想的背景」では中世の龍が、それぞれ扱われる。

第一部第一章「古代日本の龍観念」では、まず中国の龍思想の古代日本への流入の相が述べられ、『古事記』『日本書紀』の中ではじめて龍観念が本格的に展開するトヨタマヒメ伝承が検討され、そこですでに龍・蛇・鰐が混同されている様子が示される。

第二章「古代日本の蛇神観念とその展開」では、大物主神、ヤマタノヲロチ、夜刀の神、イザナミノミコト、スサノヲノミコトなどが例示され、外来の龍観念を受けとめる強力な土着のベースとして、雷神や水神と重なる蛇神観念が示される。それはまた王権から排除される外部の表象でもあった。

第三章「雨乞思想と龍・蛇観念の変遷」では、もう一つの外来の龍観念である仏教的龍観念の移入とその変容が扱われる。仏教的な龍宮・龍王思想が「雨乞」という場、さらにそれが修験（山岳宗教）の場の中で土着的な水神・蛇神と習合していく様が述べられ、あわせて中世への序章となっている。

第二部第一章「中世の龍蛇観念について」では、『道成寺縁起絵巻』に見られるような、頭や足に龍の特徴を残しながら、長い胴体の大蛇として描かれるという、日本中世の新たな龍表象が示され、これを含む中世の龍蛇観念のあり方が示される。

第二章「行基式日本古地図の龍について」では、『金沢文庫蔵日本図』や『大日本国地震之図』を用いて、日本の国土を取り巻く龍が分析され、鹿島の要石に見られるような国土観が述べられる。

第三章「『竹生島縁起』における龍の「円環」のシンボリズムと国土観」では、日本の地軸と考えられていた琵琶湖の竹生島を取り巻く龍が分析される。あわせて龍と鯰の互換が中世にすでにあらわれているとし、鯰が龍に取ってかわる近世の国土観への展望が示される。

第四章「「印文」と「神璽」をめぐる中世の「地神」思想と龍観念との関連性」では、『走湯山縁起』が取り上げられて、日本国土の地下に地脈のように潜む地龍の存在が示され、

それが、古代におけるヤマタノヲロチ的な荒ぶる蛇神の中世の変容と捉えられる。さらにそれが、密教の言説の中で、日本の地主神である第六天魔王と重なることが示される。

第五章「大地のシンボルあるいは地主神の顔を持つ中世の龍」では、陰陽道の「五龍王思想」が述べられ、そこから地龍と堅牢地神が結びつくことが示され、さらに、『白山縁起』や『彦山流記』に見られる九頭龍や『神道集』に見られる地底の龍宮などが分析される。

このような内容に対して、審査会では、固有と外来という二項対立の図式で龍を分析することへの危惧、また西洋のドラゴン研究の立場から、虫やドラゴンや蛇を含む「ヴルム」というドイツ語の観念と龍蛇観念の対比という提案、さらに龍と蛇をはじめから分けて考えることの妥当性への問いかけがなされた。また、大蛇（おろち）の眼（まなこ）のかがやきという『日本書紀』の表現から、眼・鏡・反射のテーマについても議論が交わされ、神話論の領域にさらに深く踏み込むことが可能であることが指摘された。本論文が着目した第六天魔王と龍との重なりをどのように捉えるかが中世の龍を深く理解する鍵でもあるだろうという指摘もあった。その他、引用の仕方や資料の取り扱いについての注意もなされた。しかし、レレウィン氏の論文は龍蛇観念を主軸として日本の龍を新しく捉え直しており、その独創性を高く評価することで意見が一致した。さらにこの論文が、膨大な資料群を取り扱い、先行研究である『龍の棲む日本』（岩波新書）などの黒田日出男氏の研究をふまえた上で、古代からの展開という視点や、地神・荒神という面からの斬り込みという新たな視点を設定することで、日本中世の龍についての新しい見方を提示したということも一同から高く評価された。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。